



平成二年度年次晩餐会々場風景

平成二年度年次晩餐会が旧ろう一

平成二年度年次晩餐会 昨年を大幅に上回る 六百二十一名が出席

日、皇太子殿下をお迎えし、東京・品川の新高輪プリンスホテル国際館バミール三階「北辰」で開かれた。開会に先立って「北辰」に隣接した「慶雲」の間では、恒例の簡易バーやTシャツ、クラブタイ、バッチなどJACグズの販売コーナーが設けられたほか、名誉会員・故秩父宮殿下ご愛用の登山用具、名誉会員・故植有恒氏使用の登山用具の展示会や、平成二年度の海外登山基金の適用を受け、海外登山を行った(株)日本山岳会東海支部創立三十周年記念事業・日中友好天山山脈雪連峰登山隊一九九〇、青年部、高所

登山委員会との共催で計画された(株)日本山岳会第一次バミール登山隊一九九〇の報告会も行われた。年次晩餐会は松田雄一総務担当常務理事が進行役を務め、式次第が進められた。挨拶に立った山田二郎会長は冒頭、「徳仁親王会員が皇太子殿下であると同時に、登山家としてご出席されたことに感謝いたします」と謝意を述べたあと、晩餐会の場を移したことにふれ、「はたしてこの北辰の間がいっぱいになるかどうか当初は心配で、今回は特例として夫人同伴も考えた」ことも披露しつつ、大要次のように語った。「日本山岳会はアルパインクラブという原点に立って、直接、間接的に応援しようということで、海外登山基金を設けた。その適用を受け、二つの登山隊が出発、成功をおさめた。参加し

中国・ナムチェバルワ峰については正式に中国政府から登山許可がおりており、現在偵察隊が行っている。ナムチェバルワ峰に中国は過去四回に亘って挑戦したが成功していない。この度の日中友好合同登山隊を含め、この二年間に限って登山を解禁するというのが中国政府の意向のようだ。会長就任以来、自然を、仲間を、命を大切にしよう、というスローガンを掲げているが、ヒマラヤン・アドベンチャー・トラストの国際会議が明年、日本で開かれる。日本でも(株)日本山岳会、(株)日本山岳協会、日本ヒマラヤ協会、日本勤労者山岳連盟のヒマラヤ四



1991 年 (平成 3 年)
1 月号 (No. 547)
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

目次

平成 2 年度年次晩餐会……………	(1)
海外の山……………	(2)
「ビンソン・マシフ」	
ナムチェバルワ峰偵察隊(第 1 報)……………	(4)
第 1 回「海外登山基金」	
助成登山隊報告(2)……………	(4)
伴野清さんを悼む……………	(5)
訃報 伴野清氏……………	(6)
東西南北……………	(6)
「HAT-J 発会式」「モンゴルからのお客さま」「続山の画文集」	
「嘉門次小屋のカレンダー」ほか	
図書紹介……………	(9)
「京都北山を歩く」「四光峰の風」「やまなみ登山」	
報 告……………	(10)
「熊本支部秋季例会」	
「北海道初冬山行」	
自然保護随想……………	(12)
会務報告……………	(12)
支部長会議、支部事務局担当者会議、ルーム日誌、会員異動、タンポチェ僧院再建協力者ご芳名、平成 2 年度定期刊行物受入報告、新入会員(復活)、住所・住居表示変更	
お知らせ……………	(14)

▶日本山岳会事務取扱時間
月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時
日曜・祭日は休み
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

た若い隊員の将来が楽しみである。一方、オールドパウも健在で、還暦を迎えた斎藤惇生・中島道郎両会員が本年五月、京都大学ヒマラヤ医学術登山隊としてシシヤパンマ峰登頂を果された。私も昨年、モンブランに行ったが、会長が行ったのならと続々出発、それぞれ登頂、私の偉業は陰の薄いものとなってしまった。

お知らせテレフ電話
234 六六五九

団体が、日本ヒマラヤン・アトベンチャー・トラスト(HAT-J)の組織を設立、全面的に協力することになっている。

長野の冬期オリンピックについて、岩菅山新設コースが白紙撤回となり、既存コースを改修使用することになった。これはわれわれの自然保護運動が功を奏したものと見える。

仲間を、命を大切にしようということに関し、のちほど会長特別表彰を行いたい。

松田常務理事からは会の現況報告が行われ、物故者黙禱のあと永年会員の発表がなされた。

新永年会員は奥野正亥、杉本義信、東浜義男、小野幸、跡部昌三、織内信彦の六氏で、松田常務理事が略歴(別記)を紹介。当日出席の奥野、杉本、東浜、織内の四氏に、山田会長から永年会員章が手渡された。

永年会員を代表して挨拶に立った杉本義信氏は、昭和十五年、大学三年生で入会。松方三郎東京支部長のもと、昭和二十七年、藤井運平さんの後任として理事長に就任、昭和三十二年に野田三郎さんにバトンタッチするまで、支部運営に微力を尽しました。当時の本部長は榎恒さんで、会の運営で難題を持ち込み、榎さんを困らせたものです」と印象深げに語られた。

海外の山

ビンソン・マシフ

氷の大陸、南極が二十一世紀にどのように人類に身近な存在になるのか、は気になるところである。各国の観測基地が軒を並べ、国際隊が横断に成功したといっても、この大陸はまだ未知のものに溢れているからだ。

たとえば、長い間、南極大陸には五千メートルが峰がどっしり構えていると信じてきたのに、その盟主、ビンソン・マシフは、どうやら四千メートル峰であることが、最近の測量の結果明らかにされた。

四八九七メートル、が正しい。(従来は五一四〇メートルとされ、実際現行の地図の殆どはまだこの数字を使っているとと思われる)

無論、高度が減ったからといって登山家たちの情熱が冷める筈はなく、おまけに航空機で客をベースキャンプまで運ぶ「アドベンチャー・ネットワーク」という親切な「ガイド会社」が誕生したため、小人数のパーティーでも相應の経費を負担すれば大陸最高峰に挑戦できるようになった。

北極点まで氷海上をオートバイで到達したことで知られるライダーの風間深志(四〇)もこの夏(日本ではこの冬)、この会社の協力を得て、ビンソン・マシフのてっぺんをめざした。風間はオートバイによる南極大陸横断を当面の目標にしており、ビンソン・マシフはその偵察行でもあった。

天候を待って十一月二十六日、チリのプンタ・アレナスからDC6型チャーター機で南極入り、さらにツイン

オッター機に乗り換えてビンソン・マシフBC地点に入った。

同行は、南米に詳しい仲間の佐藤芳夫(四一)と、ガイド一人。ガイドといっても「自分のことは一切自分でやる」が、南極の決まりで、他人はあてにできない。

アプローチがおそろしく長く、ヒドン・クレヴァスが無数にあった。さすがにオートバイというわけにはゆかず、二本の足だけが頼りの登攀となった。とりわけC1からC2に向かう途中の壁がきつかったという。

南極は今、白夜で、一日二十四時間明るい。そのため、できるだけ夕方以降の行動とした。東の壁での登攀が多いためそこに陽があたる夕方以降の方があたったから。

十二月二日午前二時登頂。BCから六日と二時間半だった。「極地のそのもう一つの極ですからね。やったって、思いましたよ。大陸がゼーンぶ見えて、最高だったなあ」と風間は、喜びを隠さない。

オートバイも試しに乗ってみて、北陸よりもずっと乗りこなせそうな気がした、という。

「とにかく下は海じゃなくて、大地ですから」

風間に三週間遅れ、田部井淳子をリーダーとする日本女性隊もビンソン・マシフに向かった。この原稿は読まれる頃には、結果はわかっているだろう。

一九六六年アメリカ隊が初登頂、八三年には三浦雄一郎らが二次登頂したこの山、八八年には中国隊も登頂、既にガイドの中には複数回登頂した者もいる。強風が吹き荒れば、ヒマラヤ七千メートル峰以上の厳しさが予想されるものの、マッキンリーのような人気者になる日は近いかもしれない。

(江本嘉伸)

会長特別表彰は、本本哲会員に対するもので、詳細は会報・平成二年十月号(五四四号)に紹介されている。本本会員には山田会長より表彰状が手渡されたが、その文面は、「あなたは、本年九月トランゴ山群の岩場において、パラバント事故のため頂上部分にとり残された仲間の救出にあたり、自己の負傷をも顧みず、献身的な行動をとられ、無事救出に成功されました。あなたのとられた果敢な行動の輝かしい業績をふまえ、その功績は誠に顕著なものがあります。平成二年度の年次晩餐会にあたりここにその功績をたたえ表彰します」。

さらに松田常務理事からは、会員番号三桁の伴野清会員(二八四番九五歳)、麻生武治名誉会員(五二九番九二歳)、中沢真二永年会員(六二三番九九歳)、野口末延名誉会員(八〇六番九二歳)、中川喜久雄会員(八一五番九二歳)、早川種三名譽会員(九二三番九四歳)、三田幸夫名誉会員(九二四番九一歳)、広瀬潔名誉会員(九三一番九四歳)の近況報告もなされた。

吉沢一郎(九三〇番八八歳)、佐々保雄(九六九番八三歳)の両名誉会員は元気な顔を見せられた。

乾杯音頭はアデレードから里帰りした中村テル名誉会員。「神田のYMC Aで開かれた年次晩餐会は、二百人も

集まれば大成功でした。本日、永年会員になられた皆さんは当時美男子でし、もち論、私も美少女でした」とと沸かせ、「山も友も大切にすること、これからは昨日帰って参りました。う、と述べ、来年の晩餐会出席も約した。

会食、テーブル懇談をはさんで、HATのトラスティを務める田部井淳子会員、シシヤパンマ峰の登頂を果たした斎藤淳生・中島道郎両会員、日中友好天山山脈雪連峰登山隊一九九〇の徳島和男隊長以下隊員、第一次パミール登山隊一九九〇の大谷亮隊長以下隊員、国際山岳兵連盟総会に日本を代表して参加した阿達憲会員らの紹介、新入会員・支部会員紹介が織りまぜて行われたほか、先の三国友好登山で名誉総隊長を務めた橋本龍太郎会員(大蔵大臣)はスポーツ振興基金にふれ、当初登山に対しては助成しないことになっていたが、その後登山も含まれることになったことを報告、今後とも、党派を越えての協力を、と、堂本暁子会員(参議院議員)にエールを贈った。

皇太子殿下ご退席のあとも、会員懇談はなかなか尽きなかったが、やがて定刻を迎えた。

ズのPR、翌日の幕山懇親山行の説明を行ったのを潮合いに、平成二年度年次晩餐会の幕は閉じられた。

名札と引きかえに袋に用意された山岳第八五年号(一九九〇年)、会員名簿一九九〇年版を手手に、各自会場をあとにしたが、その袋にはぬかりなく、日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト設立趣旨ならびに入会のお願いと、タンポポチ僧院再建の募金最後のお願いが入っていた。

なお、年次晩餐会のしおりによれば、出席者は昨年を大幅に上回って六百一十二名、名山名を付した円卓テーブルも六十四に達した。設営、運営にご苦心された各理事・委員に対し深謝申し上げたい。

〔物故会員〕小原勝郎(名誉会員)、後藤幹次(同)、篠田軍治(同)、神津得一郎(永年会員)、塩田輔雄(同)、窪田健治、中田清兵衛、佐野昇三、杉山元治、南崎大海、米田泰男、高木健太郎、内田英夫、宮崎克之助、辻井秀一、玉名金助、根本大、小田島房志、松村周典、宇田正治(敬称略)

写真・武居台三／文責・高田眞哉
〔新永年会員紹介〕
奥野正亥(一八一八)

明治四十四年九月二十二日生
京城竜山中学校卒
紹介者 角田吉夫、吉澤一郎

杉本義信(一八二七番)
大正五年一月七日生
早稲田大学卒
紹介者 今村正二、関根吉郎

東浜義男(一八三四番)
大正八年一月二日生
早稲田大学卒
紹介者 吉坂隆正、関根吉郎

小野 幸(一八三八番)
明治四十五年七月二十七日生
明治大学卒
紹介者 吉澤一郎、望月達夫

跡部昌三(一八四三番)
明治三十九年三月三十日生
明治大学卒
紹介者 吉澤一郎、望月達夫

織内信彦(一八四六番)
明治四十五年二月一日生
東京農業大学卒
紹介者 小島烏水、広瀬潔

〔永年会員となった感想〕
奥野正亥氏
「一九四〇年冠帽連山より帰ると、故西岡一雄氏より言われて入会、以来五十年凡々、ただ会員であっただけです。」

▼杉本義信氏
「大学三年の時故藤島敏男さんの紹介で入会し、早速図書委員をやらされました。当時の事務所は虎の門の角にあり、『山』十月号にあるロンドンA・Cルームにそっくりでした。お茶の

水の岸体育館の中の山小屋の様なルームの頃は若手OBの餓鬼大将でギルギットから近い、ラカボシを登ろうとしたのですが、英国大使館からケンブリッジ大が登るので断られました。

会の仕事でも、楨会長につっかりましたが十年後、小生、半導体工場長をしております時、二〇〇名程の成人式があり、楨さんに話して頂き、皆にも楨さんにも喜んで頂きました。」

▼東浜義男氏
「未だ、仕事の第一線に在り、なかなかお手伝いできないのが残念です。」

▼小野 幸氏
「虎の門時代、お茶の水時代の頃を思うとなつかしく存じます。」

▼跡部昌三氏
「昭和五十年、足の疾患で山歩きはやめましたが、永年山をやって来た喜びと恩恵を感じ、永年会員にしていたいたのもその一つと感謝しています。なんのお役にも立たなかったのは申しわけありません。余生も山を胸に楽しみたいと思っています。原稿はあちこちに随分と書きました、今も少しは書いています。現在今日は骨折で病院のベットにへばりついています。」

▼織内信彦氏

「五十年前、創立者小島烏水さんを阿佐ヶ谷のお宅に訪ね、入会紹介者になっていただいたことが、つい昨日のことのように思い出されます。」

ナムチェバルワ峰偵察隊

(第一報)

朝もやの成都空港を定刻七時三十分に出発してから約一時間、左手前方にナムチェバルワがその姿をあらわした。私は狭い窓ガラスに顔を押し当て息もつかず、その山容をながめていた。

まだ人類の一步をその頂に許していない世界最高の未登峰ナムチェバルワ。一九八〇年チョモランマ登山の折、始めてみたそのままでの姿で多くの衛星峰を従えて突っ立っていた。

一九九〇年暑い夏の盛り、ナムチェバルワ峰の登山の許可の連絡が突然舞い込んでいた。いずれ日本山岳会に来るものと信じていたが、余りにも唐突であった。

十月十二日には山田会長、伊丹高所担当理事が訪中。北京にて中国登山協会と読売新聞社、日中友好協会の四者で、ナムチェバルワ峰偵察の話合いが行なわれ、急ピッチで本隊に向けての行動が開始された。

思えば長い道のりであった、日本山岳会が始めてチベット側からのチョモランマ遠征(登山)を実施して以来、

宮下さんをはじめ、中国登山の折、訪中の折に中国登山協会への根回しに奔走してくれた先輩諸氏のナムチェバルワ峰への想いが日増しに強くなったのである。そしてその働きかけの結果がここにあった。

北京会談にて十一月五日から十二月二十四日までの偵察日程が決まり、約二週間で偵察用の装備、食糧その他を調達するためにあわただしい時を過ごした。

隊荷の梱包は明治大学山岳部の現役の方々にお世話になり、十月末何とか一・五の隊荷を北京に向けて発送することが出来た。

十一月三日北京にて、偵察行動の打ち合わせを行ない、十一月十一日ラサに全メンバーが集結しました。そして隊荷の積み込みを終えた十三日、中国六名、日本三名、読売三名の一行がベースキャンプに向けて出発した。

私は空撮のため読売チャーターの飛行機の到着を待ったためラサに滞在していたが、十一日後の二十一日、待望の飛行機が到着、二十五、二十六日とナムチェバルワの上空を飛ぶことが出来ました。

期待通りの素晴らしい山でした。丁度、先発隊も西北西稜の偵察をしているはず。そして二十八日ラサを出発、約五七

〇キをひた走り、二十九日夕方ナムチェバルワのベースキャンプに到着しました。ナムチェバルワの西面が目の前にあります。目を見張るような岩壁です。

一九八六年以降、日本のヒマラヤ登山が世界のレベルからどんどん離れてしまった現在であるが、ナムチェバルワを登るためには、日本の冬の岩壁の長い継続登攀をくり返し実施し、耐えた人が必要でしょう。

我こそはと思う人達の参加を望む次第です。

ナムチェバルワBC(大本営)にて 偵察隊長 重廣恒夫

第一回「海外登山基金」助成

登山隊報告(2)

日本山岳会第一次パミール登山隊 一九九〇 青年部・高所登山委員会共催

昨夏のパミールは入山の基点となるキルギス共和国オーシシュにおける民族暴動、さらにBC入り前日レーニン峰C2を襲った未曾有の大雪崩などの影響により、多難な幕開けとなった。

七月十四日アチクタシにあるレーニンBC(三五五〇呎)に到着した我々

一行六名は、翌日から予定の登山活動に移った。実質二十四日間で七千餘峰の二座登頂を狙う戦術は以下の通り。

まずBCの裏山ペトロフスキー(四六五〇呎)を往復。その後コルジェネフスカヤ(七一〇五呎)とコミュニティム(七四九五呎)両峰のBCとなるモスクビン(四二〇〇呎)へヘリで移動。手始めに、比較的容易なコル峰ツェトリン稜で数度の順応行動の後、同ルートより登頂。返す刀で今度はコミ峰ポロードキンルートに取付き一気にソ連最高峰を陥す、という弱小隊にしてはかなり虫のいい筋書であった。

七月十七日ペトロフスキーでの順応を終えモスクビン入り、続く一週間で六千餘ラインまでの到着とデポを完了しアタック体制を整えた。しかしこの間、学生の高市が高山病で倒れ、先輩の熊崎が付き添いアチクタシへ下山する、というアクシデントが発生。全員登頂の目論見は早くも挫折した。

複数登頂を目的とした短期速攻では序盤の大きなつまづきは致命的だ。ましてや今回のような高所未経験者主体の隊員構成では、隊を二分して調整を図ることもままならない。こういう事態は当然予想されるべきであり、自分の読みの甘さと無策ぶりにひどく腹が立った。

しかしながら二十七日に行なわれた

頂上アタックは、残ったメンバーの頑張りによりなんとか成功させることができた。戦列復帰が遅れ惜しくも登頂を逃した熊崎には気の毒なことをしてしまった。以上の結果から、より困難なコミ峰は我々の力ではリスクが大きすぎると判断し、レーニン(七一二四呎)への転進を決断した。

七月三十日から三回に分けて再びアチクタシに戻り、八月三日ようやく全員がC1(四三〇〇呎)に集結することができた。この不手際は、一機しかないヘリの輸送能力が常に限界状態にあり、計画を途中で変更した場合なかなか乗せてもらえない、という事情に因っている。パミール登山特有のこの種の人為的なトラブルは、実際の登山行動以上に終始私の頭を悩ませ、不快なストレスを増幅させた。

貴重な時間を失ったことにより、レーニンは完全な一発勝負の山になった。八月四日ルートを西稜に決めアタック開始。先の大雪山崩にやられたC2(五二〇〇呎)は痕跡もなく吹き飛ばされており、我々は右手のガレ場を上った斜面を削りテントを張った。翌

日私と佐野がC3をとばしてC4(六五〇〇呎)入り、六日四時間の登行で二つ目の七千を手中に収め、帰路C4を撤収しそのままC2まで下降した。帰国前日なんとかBCに帰ることがで

きたのは、明大山岳部仕込みの佐野の気力と好天に助けられた感が強い。

一方、何人かの隊員が余力を残しながら途中でリタイアしてしまった理由については不満が残る。登高意欲の減退と自己管理の甘さが、終盤での明暗を分けてしまったような気がしてならない。若さにまかせた馬力だけでは通れないのが高所登山の妙味のひとつであるとするれば、還暦の大先輩が見事八千餘峰を陥している事実は、多くの

伴野 清さんを悼む

この秋は世界中に晴天霹靂が多かった所謂 Hapening である。日本の登山界、役の行者や播隆上人の昔はいざ知らず明治となってW・ウェストンさんあたりの刺激を受けて、信州、飛騨辺に足跡を踏み入れた人の中では伴野さんは大長老です。

つい先達霜月十七日ジョン・ラスキン(J. Ruskin)の勉強会でお目にかかったばかり、しかも伴野さんとRuskinの研究の第一人者伊井早大名誉教授との対談というか、論争はあの日の聴物でした。その元気のいい伴野さんの御他界を今朝の新聞で見た時は気象現象と同様人生不老不死はあり得な

示唆と教訓を含んでいると言えるのではないだろうか。参加隊員の今後の精進と次なる活躍を切に願ってやまない。

最後に、本計画の実施に際しては、今年度より新設された海外登山基金より多額の援助を頂いた。にもかかわらず、このような不本意な結果に終わったことは全て私の責任であり、ご報告が遅れたことと併せ、重ねてお詫び申し上げる次第である。(大谷 亮)

麻生 武治

い。伴野さんが旧制第一高等学校の紺がすり袴の時分から知合いの僕には晴天の霹靂の感あるのみ。

上高地が人間臭くない時分高師附属中学生だった伴野さんは山口成一、梅沢親光等の仲間と槍に登っている。僕が中学卒業の年一九一七年夏、信州大町の対山館を基地として一高旅行部の委員であった伴野さんが対山館主人の百瀬慎太郎さんを参謀に、当時は専ら縦走流行だったから大町をふり出しに一高旅行部も教隊を出していた。その総指揮をとっていたのが伴野さんと記憶する。

突如御昇天の伴野さんは師走の虚空



を駆けめぐるっておられる。かつての健脚を偲び、武坊も後につづきます。何卒よろしく。

HAT-J 発会式

かねて『山』でもお知らせしてきましたが、ヒマラヤの自然保護を、登山者の立場から考えていこうという「ヒマラヤン・アドベンチャー・トラス（略称HAT-J）」の発会式が、十月十六日、東京・六本木の国際文化会館で開かれ、JACC会員や、自然保護関

係者などの賛同のうち、活動の第一歩をスタートしました。

発表式はまずセミナー・ルームで、発起人や山岳関係者、それにヒマラヤ地元の関係大使館の方々など約百二十人が参集、JACCの山田会長の「今やヒマラヤ保全は日本の山岳人の義務。日本の山岳界として、四団体（JACC、ヒマラヤ登山協会、勤労者山岳連盟、日本山岳協会）が協力する事業は、今までほとんどなかったが、これを機に、共通問題を話しあう気運としたい」という挨拶をはじめ他方面から、「自然保護の精神の重要性」を指摘する声をいだいて、すめられた。

中でも、インド大使館からおいで下さったF・メノー氏の「インドは水や気候などその環境の多くをヒマラヤに負う国。ヒマラヤ保全はわが国民にとって重大な問題で、岳人の努力に対

する期待は大きいものがある」とのお話は、多くの参加者に強い印象を与えた様子でした。

HAT-Jの代表となった田部井淳子さんからは「ヒマラヤと楽しくつきあい続けるためには、子供を育てるような気持ちでこの会を育てたい」との挨拶があり、盛んな拍手を浴びました。

このあと、パーティ・ルームで行われた立食式の懇談会では、大石武一さん、沼田真さんなど自然保護分野での大御所といわれる方々、ネパールの権威、川喜田二郎さん、それに環境行政の先端でご活躍の環境庁の瀬田真哉審議官などから会発足への励ましのお言葉をいただきました。

HAT-Jは、基金その他の面でJACCのメンバーの方々の理解と協力に頼るところが大、の組織です。ヒマラヤとながく楽しくつきあうために、今後、HAT-Jをよろしく願います。

(北村節子)

モンゴルからのお客様

女子登攀クラブ（田部井隊長）が、一九八九年七月、モンゴルのツァガン・デグリ峰（四二八六呎）に登頂した際一緒に登った女子隊員五名が、アルタイ山岳クラブのバットバイル氏と共

に来日されたので、十一月二十九日、ルームにて、海外委員会、婦人懇談会の有志で歓迎の席を設けた。

バットバイル氏の挨拶のあと、岡田愛子さんの通訳で婦人一人一人がお話をされた。

はじめに立たれたリッチンノルブさんは六十歳の主婦で九人の子持ちですとのこと、それぞれ十五年から二十年の山歴があり、モンゴルの山百座以上も登っている方もおられた。

婦人部の方達の手造りの夕食のあと女子登攀クラブのスライドを見せて頂いた。モンゴルの壮大な草原で繰り広げられる競馬の祭りナードム、合同登山をしたツァガン・デグリ峰、最後にオプス湖畔に勢揃いした隊員の水着姿には拍手が起った。

バットバイル氏がモンゴルのうたを披露して下さった。和音を含むうたはろうろうと、大草原の起伏を思い起こさせるように室中にひびき渡った。日本側からは、司会の神崎氏の導きで「誰でもうたえる四季のうた」を合唱した。

最後にサイヤさんから「来年はモンゴル登山四十周年に当るので是非沢山の若い方達に来て頂きたい」とのお勧めがあった。

モンゴルからのお土産、会に紅茶ポット、各人に壁かけ、パッチなどを

計報

伴野 清氏（会員番号二八四番）

年次晩餐会の席上、最も古い会員番号をもつ会員として、近況が紹介されたが、丁度、その日の午後〇時四十分、肺炎のため、東京女子医科大学で急逝された。享年九十四歳。

氏は一高旅行部の草分けとして活躍され、亡くなられる直前迄、ラス

キン協会の会合などに顔を出されていた。

葬儀・告別式は十二月五日午後一時から、新宿区市ヶ谷加賀町の自宅で行われたが、本会からは供花、弔電を送り、また中村純一、望月達夫、安江安宣、黒田初子会員らが葬儀に参列して弔意を表した。喪主は長男準一氏。

頂いて会を閉じた。出席約三十五名。

(松田 柳子)

続山の画文集

沢 聰

「山の画文集」の原稿を送って暫くしてから、坂本直行の本を書き忘れたことに気づいた。『新撰覆刻日本の山岳名著』には『山を描く』が入っているが、今後このような企画があれば入ってもおかしくない本である。追加文を書き送ったが、割付けを終えて印刷所に送られてしまった。

それで、ほかに現在でも入手しやすい本も加えて続篇を書くことにした。坂本直行の経歴については、『山・原野・牧場』の再版の言葉に詳しい。小学校の頃は作文が苦手で、いくら書くかと思っても何も思いつかばないの

で、泣くほど辛かったのが、中学一年の時山登りを始めてからは、書くことに喜びを覚えるようになったと言う。思索型でなく視覚型の少年で、小さいときから花作りに熱中し、北大の農学部を出てから一時田園調布で園芸に従事、昭和五年十勝の広尾町で牧場を共同で経営、その六年後同じ町の原野で開拓生活を始め、また農民画家として余暇には四季折々の原野や日高の山な

みを描き、一方北大山岳部OBとして登山を続けて二十数年を過している。画文集としては『山・原野・牧場』『原野から見た山』『雪原の足あと』の三冊がある。

広漠たる北海道の原野の果てに長々と連なる日高の山なみや斜里岳などを始め、山頂からの風景などを、力強い筆致で描き、本文の飾りけのない軽妙な文章と相俟って、魅力あふれる世界に導いてくれる。

『雪原の足あと』の口絵の、晩秋の日高連峰などに見られる油絵らしいマチュールの美しさは独特のもので、カシワの枯葉に埋めつくされた原野の上に横たわる純白の日高連峰など他の画文集には見られないもので、大型本らしい重厚さもある。

同じ大型本という点、藤江幾太郎の『山の画文集』と新ハイキングに描き続けた表紙絵集の二冊がある。画文集は油絵の原色版二十二点、文章とスケッチ一頁づつあるものが五十点で、特に丹念に描かれた油絵がよく、剣御前小屋からの剣岳など迫力がある。

最近、『藤江幾太郎ネパール画集』を、山と溪谷社から出版した。ネパールやカトマンズ風景、ヒマラヤの山や街などを描いたカラー図版六十点などが収められている。

山岳画家足立真一郎の画文集『山旅

素描』も新ハイキング選書第七巻として発売中である。たしかにデッサンで山旅の風景を描いたものが百三十点文章と相俟って楽しい本になっている。

画家の山の画文集にはこのほかに、芸大油絵科出身で本会員でもある山里寿男の『道ひとすじ』がある。北穂高の滝谷のロッククライミングなど国内の山のほかに、マッターホルン山頂に立つなど、アルプスやヒマラヤ紀行などが収められ、青いケシのスケッチなどもある。口絵三葉は、田村一男に似た山の静謐さ崇高さのある油絵だが本文中のスケッチも見事なものである。

山と溪谷社からは、小林泰彦の『低山逍遙』『低山再会』などの画文集が出ている。本職はイラストレーターとあるが、『アウトドアライフ入門』といった本もあり低山歩きを楽しむナチュラリストでもある。低山歩きの最も良い季節は晩秋から早春までと言い現在も山と溪谷に連載中である。

本多勝一の『五十歳からの山歩き』『山とスキーとジャングルと』『山登りは道草くないながら』も画文集としては挿絵が少ないが、口絵などの油絵もよいし、朝日新聞社の現役として、さすがに文章も読みやすく、本文中の樹木や山野草なども詳しく正確である。なお、冒頭の坂本直行は七年ほど前

にこの世を去っている。『原野から見た山』と『山の足あと』には肉筆の淡彩画の入った特装本があるとのことだが、悠久堂書店始め阿佐ヶ谷の穂高書房、本郷の森井書店、新丸子の甘露書房など、山岳書の多い古書店でも一度も見たことがない。それだけに人気があると言えそうである。

嘉門次小屋のカレンダー

柿原 謙一

十一月になって、'91年カレンダー『嘉門次小屋』が郵送されてきた。表紙は明神池のイワナ漁をする嘉門次翁の写真で、小屋の伝統をうけつぎ北アルプスへの出入口を守っておられる曾孫上條輝夫・久枝夫妻の心性が伝わる。爽やかである。

表紙をめくるとまず、モルゲンロートの明神岳の壮麗な写真が美しい。奥様の添書によると、輝夫さんの撮影によるもので、以下六頁までの写真も、すべて輝夫さんの撮ったものだと言える。

二頁の写真は、枝さきに赤味をおびた木の芽ゆたかな白樺の林。私はふと松本たかしの作句「物の芽のほぐれはぐるる朝寝かな」を思い出した。しかし輝夫さんは朝寝どころではない。赤

味をおびてきた梢と白樺の幹に、シヤッターを切る。早春告ぐる上高地。

三・四頁は植物で、五頁には嘉門次小屋の伝統にふさわしい炉辺の写真がでてくる。嘉門次老の生きざまを伝えるこの炉辺に、その後たくさんの登山者が、ごろ寝したわけで、炉火の赤色からは、煙のにおいもつたわってくる。ここでもまた、たかしの句「静かなる自在の揺れや十三夜」が頭にうかんだ。

最後のページには、屋根に雪おく小屋の写真があり、小屋閉めを迎えた小屋の周囲の雰囲気を見事につたえている。静かである。

戦後は観光客増加により、河童橋周辺は当世風になってしまった。六七年九月中旬徳沢から奥又白池に登り、帰路は藤島(敏)・村尾(金)先輩とともに河童橋を左岸にわたったが、すれ違った洋装のお嬢さんが藤島さんに、「あらおじさん凄いわね」と声をかけた。藤島さんはムツとした顔付になる。古びた登山姿こそこの本領が藤島さんの心だったろう。

橋から小一時間の明神池畔には、穂高社奥宮と嘉門次小屋が、当世風をよそに立っている。明神・徳沢・横尾間の道だけでも、今のままであってほしい、と私は思う。

そんな気持の私は、この度嘉門次小

屋カレンダーをみて、伝統と当世風のはざままで、小屋経営をつづける上條夫妻の心労を察し、伝統を保ちながらカメラアイを探す心性を、うるわしと思った。(九〇・一一・一六)

〔俳句〕

燕岳より常念岳へ

小林 碧郎

雲表に日の躍り出て露浄土

虹いろの露凝る絮や稚児車

星がらす雲中に立つ日矢太し

霧裂くは鎌の翼の雨つばめ

霧つぶて苔桃の実のいろそめし

雷鳥の雛かぞへ居て霧寧し

〔短歌〕

白頭山・鴨緑江一九九〇

伊佐九三四郎

天地いま二つの国の境なり神秘なる色一つなれども

白き線湖面めざして走りたりあれが国境中朝を分く

鴨緑と豆満の水をふりわけける白頭山上天池鎮まる

白頭なる山の頂神宿る神認めざる国境なれど

我が国の白山信仰ここに出づ友の言葉

を風に聞きつつ

チョゴリチマ赤き裳裾をながびかせて

天文峰を下る乙女ら

赤峰はすでに朝鮮と指をさす国境の原

に女郎花咲く

高句麗の古都なる塚の上に立ち青垣山

に何問ひかけむ

幽けきは峰わたる風高句麗の山城はる

か平壤をみむ

筏師の歌へる唄のいまはなく遠くしの

ばむ白頭山節

秘境ブータン花紀行(1)

坂倉登喜子

ブータンと聞けば青いけしを思う人が多いようだが、この花の咲く雨期にはヒルがいて、悪路の登山道が水浸しになり、長靴でももぐってしまうという話を聞いた。

それで雨期を避けて九月中旬頃まで

チョモラリベース付近にエーデルワイスが咲いていると言うことが確認されたので、私達はエーデルワイス・クラブ35周年記念山行として、ブータン・トレッキングを計画した。

去る九月十九日、メンバー八名で成田を出発、途中ニューデリーからパロまで、ヒマラヤの山々を眺めて約一時間フライト飛行して、雪に輝く山群を見て大感激した。

パロに着くと周囲は緑の山で、付近一面にコスモスの花でまず驚いた。

小さな飛行場では男性はゴ、女性はキラの民族衣裳を着た青年男女が働いていた。

約二時間位かかって入国許可を受け、マイクロバスでパロのホテルに着き休憩してから、今回成田から一緒にしたJAC富山支部長の若林さん等一行二十名と別れて、ティンブーへ向いホテルに一泊した。

次の日は高度順化のため、ド・ジュラ峠を往復した。翌日再びパロに戻りバスでキャラバン出発点まで行き、いよいよスタッフ四名、馬方二名が馬十四頭に荷物を積んで先発し、私達八名はリーダーと共に歩き始めた。

まず真先に会った花は一面のハハコグサの群落だった。溪谷沿いに進むにつれてトリカブトが沢山咲く道となり、濃い紫色のミヤマアズマギクが美

しく咲いていた。水際にはエゾネギのネギ坊主頭が揺れ、ハナイカリが非常に多かった。珍しいレンゲショウマや、タンポポの類、色鮮かなフクロソウ、センブリの花など、初秋の日本の花と良く似た花が沢山咲き残っていて、私達は花があるとカメラタイムをとり、ピスターリ・トレッキングである。

「こんなにゆっくり歩いて待って来て、すまないですね……」とリーダーのカン・ドウにメンバーが話したら、皆さんの歩き方こそ、ブータンを本当に知ってくれるトレッキングだ……と答えてくれたので、それからずっと花の道ののんびり歩きが続いた。

そろそろ高度が増してきた三四七〇メートル地点の河沿いの道まで登った頃、初めてエーデルワイスを発見して、一同歓声をあげカメラのシャッターを切る。

それ以後ずっと両側に咲き続き、三七〇〇メートルの左側斜面の草の中には一番多く咲いていて、大休止して風にゆれる花を撮るのに一同夢中になる。

—— 続く ——

次代に残そう美しい山と溪



図書
紹介

京都北山を歩く

澤 潔著

著者の澤潔氏は、戦前の京都三中の教師であり、二年前に、週刊『京都民報』に「北山の地名点描」の題で、山名・地名の語源の考証を混じえて執筆されていたので、私も購読していたものである。

それを今回、加筆調整してナカニシヤから出版されたもので、一巻から三巻まで三冊に分かれて出版されるが、現在一巻と二巻のみが店頭で販売されている。

この本では、安曇川水系より西の京都府の、JR嵯峨野線より以東の京都市北部の山々を北山として、山名の起源・山村・溪流の歴史・伝説・銘名の語源や風俗習慣・地質・文学におよぶ

幅広い紹介があり、その考証たるや、アイヌ語・韓国語は元より、大野晋博士の文献も自家蔵の中のものとなされ、さまざまな立場から考証を重ね、いろいろな人の説を紹介しておられていることは真に親切である。

著者は先に『丹後半島の旅』文理閣出版(上・中・下)三巻を著しておられ、歴史・伝承が自然と一体化した北山が大変お好きなようで、私の恩師奥美濃の『樹林の山旅』の著者である森本次男先生とも交友があり、いまなお老齢にもかかわらず、お元気で北山を跋涉して実地検分しておられるのは並み大抵ではないと感ずる次第である。

一巻は鴨川・高野川・天神川水系地帯を二巻は清滝川・大堰川水系を、三巻は上桂川・由良川水系の流域を主として書かれている。

いままでも北山や丹波の山々を書いた本は、森本先生をはじめ、京都の北山クラブの金久氏の各書や五指に余る状況であるが、地道な、山名・地名考証・伝説・歴史民俗をからませた出版はこの書をおいて今だに一書もなかったのか、待望の書と言えるのではなからうか。

『京都北山を歩く』①一九八九年五月、『京都北山を歩く』②一九九〇年五月 定価①②共一九〇〇円 (坂井久光)

四光峰の風
—— チベットの白き頂に立つ ——
大阪市立大学日中友
好学術登山隊編著

これは、大阪市制一〇〇周年を記念する事業の一環として、大阪市立大学山岳会が、未踏の四光峰七三〇八メートル初登頂の公式報告書である。

大きな犠牲を払ったランタンリルの初登頂から十年、一つの節目の登山である。

公式報告書の編集パターンによって、手固く、要領よくまとまっている。内容は関係者の挨拶。カラーグラフ、第一章キャラバン、第二章登山報告、第三章アタック登頂・強風にあおられて、四〇七章、隊日誌、行動表、個人の感想、隊員紹介、資料編となっていて、一般向きな内容となっている。

こういう登山隊は、送り出す側のOB会の舞台裏でのシナリオ作成が実に苦勞が多いものであるが、さりとて書かれている。

記念登山の目玉になる処女峰の選定や、その山が、登頂確率が高く、かつ

安全性の高いこと。加えて山の姿の美しいこと等々。なかなかむづかしい。

相反する自然条件がいくつかありなお中国の奥座敷チベット自治地区、チョー・オユー山域にあるということになれば、登山許可の枠組みの制約を受けるから、すべてこちらの自由な選択が通らない。天安門事件など思わぬ事態に遭遇しながらも、忍耐強く接衝の末、未解放の四光峰の許可を入手し、登山を實行した首脳部のご苦労がうかがわれる。

この登山の性格上、安全確実に登頂を、と身に合った極地法を採用しているが、十五人の隊員で七三〇〇呎の山に極地法を展開せざるを得ない現在の大学山岳部の共通の姿と悩みが浮き彫りにされているようだ。

資料編のうち、会計報告の中国経費で北京、成都、チベットなどの滞在費の詳細は今後の登山隊の参考になる労作で、真摯な隊の性格を表わして好感が持てる。

この登山の体験を生かし、次への飛躍の責務を荷う若手諸兄の今後の精進に期待したい。

一九九〇年七月 毎日新聞大阪本社
発行 B5判 一三二頁 非売品
なお、頒布ご希望の方は、三五〇〇円(郵送料込み)で、(宛先)大阪
市立大学AC事務局(島川法律事務所

所) TEL〇六一三六五八八六六まで

(大塚博美)

やまなみ登山

九重 日田玖珠 津江山系

日田登山倶楽部
代表 弥永敏明著

この本は、九州は大部分の日田と玖珠地方周辺の山々をホーム・グラウンドとする日田登山倶楽部が、地域の研究成果をまとめた案内書である。

九重山群から玖珠の山々、津江山系、日田の山々の四章に分けて、これらの山域の代表的な約五十の山々や溪谷、高原、峠などを紹介している。

九州本土の山々は、高さこそ最高峰でも一八〇〇呎に達しないが、初夏に全山を紅に彩るミヤマキリシマ、緑の絨毯がスロープを埋め尽くす高原、秋の陽に黄金色に輝く広大な茅戸、火山特有の荒涼とした露岩が雪をまとった冬山など、他にはない美しさと魅力を秘めている。

しかし、まだ「自然が豊か」といわれるこの地域も林道や「やまなみハイウェイ」、また九州横断高速道などの開発によって、誰でも手軽に山へ登れるようになった反面、自然の荒廃が予想以上のスピードで進んでいる。

開発と自然保護の狭間で、郷土の山

に自らの足で登り、自らの目で、ふるさとの自然が今どんな状態にあるか確かめて欲しいと著者はいつている。

本書は、単なる登山ガイドに止まらず、その山の成り立ちや動植物などの自然はもとより、その山にまつわる歴史や麓の神社、寺院、観光・名勝、風物、伝説などにも目をむけてあり、また登山後に気軽に入れる温泉も紹介しているので、山登りの興趣を一層深く豊かにしてくれるだろう。

巻末には、交通、宿泊(旅館、山小屋、避難小屋、キャンプ場)、温泉、山開き、掲載山岳一覽表などがまとめられてあり便利だ。

このところ中高年者、家族連れの登山が増えている。本書はこれらの人々を対象にした無雪期のガイドであるが、高度もあり地形が迷いやすく積雪もある山も入っている。これらの山域の九州本土における位置と特徴、年間の気象傾向など、登るにあたっての留意点があればよかった。

一九八九年十月十日 西日本新聞社
発行 二三〇頁 定価一四〇〇円
(伊藤博夫)

報告

熊本支部秋季例会

九州背梁山地の南端、周囲を急峻な

山に囲まれた山里「米良」。ここは、かつて米良荘と呼ばれ、五家荘、椎葉荘と並ぶ平家落人伝説の残る、九州有数の辺境だった。近年、交通網の発達と共に昔の面影は次第に薄れつつあるが、なお深い山並に囲まれた、九州でも最も深い山地である。

この米良(西米良村)を取り囲むように「米良三山」と呼ばれる山々(市房山、石堂山、天包山)がそびえている。今回は、この三山のひとつ石堂山(一五四七呎)へ紅葉山行となった。

前夜(十月二十七日)は西米良村の中心地「村所」の旅館に一泊。村の中央を流れる一ッ瀬川に面した宿は釣り客に人気があるらしく、室内のあちこち魚拓が飾られている。その夜は川のせせらぎと、遠くかすかに聞える鹿の鳴き声を聞きながら床についた。

翌日は晴、八時過ぎ宿を出発。一行四名は七台の車に分乗して、一ッ瀬川に沿って上流へ向かい、四時ほど走ったところで井戸内林道に入る。

石堂山は九州本土では標高差のある山として知られ、登山口の上米良(標高三〇〇呎)から歩けば四時間強の行程。我々中年登山隊には、少々時間がかかりすぎるので、中腹まで林道を利用させてもらうことにする。

道は狭いが舗装された快適な道を左右に屈曲しながら次第に高度をあげて



熊本支部秋季例会

ゆく。途中、天包山(一一八八呎)の九合目にある天包山公園へ寄る。この山頂一帯は、明治十年の西南の役の激戦地となったところで、官軍と薩軍の激しい攻防戦が展開されたといわれ、それを物語るかのように付近の巨岩には当時の弾痕の跡が今も残っている。

再び林道を戻り、ひと走りて林道終点に着く。身仕度を整え一〇分ほど歩くと、上米良からの登山道の六合目に合流する。

石堂山は近年、伐採、植林が進み、かつての原生樹林は少なくなったが、中腹から山頂にかけてはなお自然林が残り、美しい秋の紅葉と山頂からの展望で九州岳人に知られている。

すっかり紅葉したブナ、ナラ、カエデの多い自然林のゆるやかな尾根道を落葉を踏みしめながら進む。八合目あたりから急坂の瘦せた稜線となり、登るにつれて左右の展望は開け、市房山の大きな山体が一ツ瀬川の深い谷を隔てて秋の陽に輝く。

次々と現れるピークを乗り越え、十二時、霧島六社権現の祠が鎮座する山頂に着く。祠の前には、かつての信仰登山の名残りであろうか、赤く錆びた鉄製の鉾や小さな鳥居が供えられている。周囲の樹木は伐採され、樋口山に連なる北面を除いて展望は雄大で、九州南部の山々が一望のもとに見渡せる。

北海道初冬山行

札幌近郊

定山溪小天狗岳

北海道支部

「晩秋の小春日和に落葉をカサコソと踏み締め、ご家族連れで軽く一汗かいてみませんか。」と、支部会員に呼びかけたところ、二十数名から参加の申し込みがあった。

今年は冬の訪れが例年より遅く、温かい秋を満喫していたところが、なんと十日夕方の天気予報では、「急速に発達しながら本道の西海上を北上した低気圧は、十一日朝には間宮海峡に進

み、猛烈に発達する。また上空には十二月上旬ごろの寒気が張り出し……」

十一月十一日朝起きると、予報どおり外は白一色の銀世界、札幌も平野部での初雪。文字どおりの「初冬山行」には打ってつけた。

午前九時地下鉄真駒内駅前に十六人が集まった。遠くは函館から横内氏が車で駆け付け、さらに初顔の会員も来ている。早速車四台に分乗して九時十五分に出発する。定山溪温泉までの国道は、雪道の運転に戸惑う車で、ノロノロ運転、中にはスノータイヤに履き替えていない車もあって、坂道で難渋している車がある。午前十時少し前に定山溪ダム下園地に着く、新雪が二十

センチもある、見上げると小天狗岳頂上付近は吹雪模様だ。初雪を踏んではしゃいでいる会員もいる。ここ小天狗岳はアゴを出すほどの急斜面の直登と七九〇段余の不整階段登高に悩まされることも知らないで……。

午前十時二十分登山開始、一面の銀世界に満足しながら歩を進める、途中で雪がチラチラ降ってきた、荒い息遣いの中ただひたすらに登るとやがて展望が開け、眼下には定山溪ダムに堰止められた「札幌湖」が、日本画の墨絵のように、黒く静まりかえっていて、その荘厳さに感動の声も上がっている。

午前十一時十分全員無事小天狗岳頂上に立つ、頂上は一坪ほどの広さでみんな交代で記念撮影に、頂上乾杯酒にとそれぞれが登頂を祝った。頂上付近はやはり風雪が強く、少し下って軽く昼食をとり休む。

午前十一時四十分下山開始、先ほど登って来る時に悩まれた階段も、所により三十センチの雪に隠れていて、下りは良いクッションになっていて快調に降りられた。

正午過ぎにダム下に着き、午後〇時三十分には予定より早く定山溪温泉の「溪流荘」に着き、冷え切った体を温かい露天風呂で疲れを癒し、落ち着いた和室で、いつもの宴会となり、こと

のほかビールがうまかった。思いがけず安田氏と那須氏がリコーダーを持参して、山の歌の合奏となり、これに合わせたのコーラスが鳴り響き、時の経つのをしばし忘れて楽しんだ。

参加者 赤石喜恵子、大久保五郎、大久保節子、亀井秀子、久保田優一、小須田喜夫、酒巻吟一、鴨原義昭、高澤光雄、高橋恒志、那須博文、水科行雄、安田成男、柳田涼子、山上郁子、横内泰美 (水科行雄)

会務報告

支部長会議

▼日時 平成二年十二月一日十三時～十六時

▼場所 新高輪プリンスホテル、国際館バミール「白玉の間」

▼出席者 山田会長、村木・藤平両副会長、小須田(北海道)、岡田(秋田)、佐藤(岩手)、村上(山形)、庄司(宮城)、中嶋(福島)、佐藤(越後)、赤羽(信濃)、古屋(山梨・代理)、安間(静岡)、鈴木(東海・代理)、佐藤(岐阜・代理)、若林(富山)、増江(石川)、斎藤(京都)、宗實(関西・代理)、吉川(山陰)、権藤(福岡)、梅木(東九州)、奥野(熊本)、魚本(宮崎)、松田、西村両常務理事、大島、吉村両評議員、児玉(事

〔自然保護随想〕

アニマル・トレッキング

身障者にスキー体験させるボランティアをしていた時期があった。盲人のスキー感覚をつかもうと、闇夜のゲレンデを滑ったこともあった。初めてオコジョと出会ったのもそうした晩だった。存分に人の手が入ったスキー場も、夜は野性の哺乳動物の世界であることを知った。以来四半世紀このかた、積雪期に幕営した翌朝は、しばしばアニマル・トレッキングを試みるようになった。

冬の曙光が真っ白な山頂から降りてきた。新雪の上には、動物の足跡がキラキラと無数についていた。宵の口に雪が降り止んだ後、テントの外では足跡の主らによる壮絶なドラマが繰り広げられていたのに違いない。早速、キツネとおぼしき足跡を追うことにした。

日本に住む哺乳動物のほとんどは夜行性である。といって人間が夜間に行動しても、彼らと出会うことは先ずない。しかし彼らの足跡や糞塊などの落し物を追ひ、分析することによって、彼らの正体を推測し、彼らが昨晚何をしたかを想像することはできる。

さて追いついて五きほど過ぎた地点で、獲物を見つけたのか、キツネの足跡に変化が認められた。修羅場の近

いことを期待した。

複数のスノーモービルが近づき、また遠ざかっていく音が聞えた。キツネの足跡は蹂躪されていた。スノーモービルが身障者をゲレンデへ送迎する利器として登場したとき、私は刮目するとともに、将来、雪山での格好なレジャー道具となる予感を抱いたものだが、現実を目の当たりにすることとなった。

かつて志賀高原の外れに、友人と野外博物館を作った。やがて奥志賀にスキー場が開発され、さらに焼額山スキー場ができるにおよんで、われらの野外博物館はゲレンデの真ん中に没した。焼額山は全山クマザサにおおわれているせいか、開発に反対する声を聞かなかった。

一方、林道と雑魚川をへだてて対峙するここ岩菅山、裏岩菅山腹は、周知の自然保護運動によってスキー場化が免れた。しかし、オリンピック誘致運動という茶番と無関係に、岩菅山のスキー場開発が計画されたとしたら、自然保護運動やマスコミは、同様の高まりをみせたであろうか。ともあれ、岩菅山の貴重な植生や、背後に広がる魚野川源流一帯のブナ林等の原生的自然環境保全のためにも、自然が守られたのは幸運であった。

同じエリアでも、国民のレジャーのために開発されてもよい自然、守られるべき自然が存在してよいのだと思う。

(市川義輝)

事務局

以上二十九名

▼議事

会長挨拶につづいて、会の現状報告として、ナムチェバルワ登山(村木)上高地山研改築計画(藤平)、ヒマラヤン・アドベンチャー・トラストにつ

いて(松田)、それぞれ報告があった。

次いで、「支部設立並びに運営等に関する規定」を一部改訂したい旨の説明が松田常務理事より次のように行われた。即ち、

①規定第十三条の報告月日を四月十

五日→五月十五日と訂正

②第九条に「必要に応じ副支部長二名以内をおくことが出来る」を追加。

③支部長、委員の任期を二年とし、重任を妨げないとする。

というものであった。これに対し各支部長より、活発な発言があったが、①、②は原案通り、③については「原則として」を入れることにより、運用すること、原案通り承認された。なお第十三条については、実務的にみると矛盾が見られるので変更すべきではないかとの意見が、小須田支部長より述べられたが、この条文は支部長の仕事の内容であり、運用上は問題なしということになった。その他、支部設立についての問題、支部長会議の議決権、支部長会議、支部担当者会議の性格等につき活発な意見交換が行われた。

最後に、各支部の報告があり、事務局からは、年次晩餐会についての協力方要請があり、定刻十六時閉会した。

支部事務局担当者会議

▼日時 十月十三日(土)十三時～十六時

▼場所 蔵王温泉アストリアホテル

▼出席者 村木副会長、松田、藤井、入沢、石橋、穴田、西村理事、中川、奥谷、鳴原の各総務委員、村上山形支部長、佐藤、小倉両評議員

佐藤兼治・佐々木民秀・岡田光行(秋田)、菊地俊彦(山形)、佐々木豊喜(宮城)、野地克也・中島正夫(福島)、山田薫(越後)、赤羽孝一郎(信濃)、磯野兼二郎(静岡)、安藤忠夫(東海)、高木基陽(岐阜)、杉山イタル(京都)、石坂久忠(富山)、水谷透

(関西)、中井俊一(山陰)、吉村健児(福岡)、西孝子(東九州)、本田誠也(熊本)、服部敬二(宮崎)

以上三千三名

村上山形支部長の歓迎の挨拶、故後藤幹次前支部長に対する黙禱、村木副会長による開会の挨拶があった。議事に入る。

▼議事

(一)支部設立ならびに運営に関する規定改訂の件

支部長会議に付議する原案につき検討が行われた。

(二)理事会からの報告

①上高地山研改築の件(石橋)

②タンポチェ僧院再建募金最後のお願(松田)

③H A T Jについて(松田)

④会員名簿について(松田)

⑤年次晩餐会について(藤井)

⑥支部集会についてのお願(入沢)

⑦海外登山基金について(西村)

(三)支部現況報告

越後、岐阜、静岡、宮崎、東九州の各支部より報告があった。

(四)各支部からの要望事項ならびに討議(司会・中川委員)

本日の会議は各支部からの意見を聞くことに重点がおかれ、次の五つの事項について意見交換が行われた。

①担当者会議の開催場所および在り

方について

米子以来、ホテルでの会議となったため費用がかかりすぎる。もう一度原点にかえて見直したら如何かとの意見がみられた。

②支部長会議の議決権は必要ないのかとの意見に対し、松田理事より、定款上では、支部長会議の議決権はないが、支部の意向は、支部選出の六名の評議員により、評議員会の場で反映できる旨の説明があった。

③支部設立に対する見解

支部設立の要件を満たす人数が集まり、支部設立の気運が盛り上ってきたら、会としては何時でも応援したい旨の説明があった。

④山研に対する質問

食事の提供、設計コンペ、募金についての質問があり、それぞれ回答がなされた。

⑤支部の現状と問題点

会費の問題(東九州)、高校山岳部の在り方(静岡・岐阜)、親子登山による啓蒙(越後)、焼山登山禁止令の所轄部署についての質問(富山)、自然保護(富山・秋田)、支部運営の多角化によるメリット(東海)、支部会報類の交換の提案(秋田)、等の意見交換が積極的に行われ、関西支部からは、支部年度計画立案上、本部の計画を二月中に教示

名古屋・札幌・福岡から、カトマンズへ直行便運航のお知らせ《予告》



- ①名古屋発着8日間 1991年3月17日(日)～3月24日(日)
- ②名古屋発着8日間 1991年3月24日(日)～3月31日(日)
- ③札幌発着8日間 1991年3月31日(日)～4月7日(日)
- ④名古屋発着8日間 1991年4月7日(日)～4月14日(日)
- ⑤名古屋発着8日間 1991年4月14日(日)～4月21日(日)
- ⑥名古屋発着8日間 1991年4月21日(日)～4月28日(日)
- ⑦名古屋発着8日間 1991年4月28日(日)～5月5日(日)
- ⑧福岡発着8日間 1991年4月29日(月)～5月6日(月)

●トレッキング・ツアー

- A ボカラ・ハイキング
- B アンナプルナ・ロイヤル・トレック
- C アンナプルナ・プレジデント・トレック
- D マナスル・スカイライン・トレッキング
- E ナガルコット、シバプリ・トレッキング
- F ガウリジャンカール・トレッキング
- G ホテル・エベレスト・ビュー

Yeti Service
Royal Nepal Airlines

ロイヤルネパール航空総代理店

アルパインツアーズ株式会社
〒105 東京都港区新橋2-2-2 川志満ビル7F

TEL. 03-3503-1911
FAX. 03-3508-2529

平成2年度定期刊行物受入報告

図書委員会

1. 「山と溪谷」1989年 No. 642~653 山と溪谷社(発行者寄贈)
2. 「岩と雪」1989年 No. 132~137 山と溪谷社(発行者寄贈)
3. 「岳人」昭和64年 No. 499~平成元年 No. 510 中日新聞東京本社(発行者寄贈)
4. 「ヒマラヤ」昭和64年 No. 206~平成元年 No. 217 日本ヒマラヤ協会(発行者寄贈)
5. 「古地図研究」昭和62年 No. 205~平成元年 No. 228 日本地図資料協会(発行者寄贈)
6. 「グリーン・パワー」1989年 No. 121~132 森林文化協会

(発行者寄贈)

7. 「国立公園」昭和64年 No. 470~平成元年 No. 479 国立公園協会(発行者寄贈)
8. "La Rivista del Club Alpino Italiano" 1988年 Anno 109 N. 1~6 Club Alpino Italiano(発行者寄贈)
9. "Die Alpen" 1988年 Jg. 64 Nr. 1~1988年 Jg. 65 Nr. 12 Schweizer Alpen-Club(発行者寄贈)
10. "Alpin" 1989年 Nr. 1~12 Ringir(購入)
11. "Ranorama of Slovakia" 1983年 No. 1~1985年 No. 4 The Government Committee for Tourism of the Slovak Socialist Republic(発行者寄贈)

定期刊行物については、これまで「図書受入報告」には含まれておりませんでした。年度末に製本合本がなされた時点で報告することにいたします。

ルーム日誌

(11月)

願ひ度い旨の要望があり、これに対しては二月の理事会に付議される翌年度の事業計画を速やかに支部に連絡することにした。

最後に松田理事によりまとめと閉会の言葉があり、次回の会議は五月十八日(土)に東京で行うことを決め閉会した。

30日	総務委員会	11月来室者440名
29日	モンゴル女性登山家歓迎会	
28日	総務委員会	
27日	自然保護委員会	
26日	ルム委員会	
22日	常務理事会、総務委員会、フィ	
20日	山研委員会、三水会	
15日	科学委員会	
14日	総務委員会	
9日	アルパインスキー会	
8日	図書委員会、自然保護、総務委	
7日	員会	
6日	評議員会、山研委員会	
5日	理事會	
2日	自然保護委員会	
2日	スケッチ山行作品発表会	
5日	総務委員会	
6日	婦人懇談会	
7日	評議員会、山研委員会	
8日	理事會	
9日	自然保護委員会	
14日	総務委員会	
15日	アルパインスキー会	
19日	図書委員会、自然保護、総務委	
20日	員会	
22日	山研委員会、三水会	
26日	科学委員会	
27日	常務理事会、総務委員会、フィ	
28日	ルム委員会	
29日	自然保護委員会	
30日	総務委員会	

会員異動

11月

退会

室木 武(八九五七)

物故

辻井秀一(五九五四) 10・28

玉名金助(四四二五) 11・6

根本 大(九六一九) 11・10

タンポチエ僧院再建協力

募金者ご芳名

五万円―竹田寛次。三万円―横山厚夫。二万円―立正大学体育会ワンダーフォーゲル部。一万五千円―安藤忠夫。一万円―柿原謙一、沢野ひとし、中井修二、嶺岸信悟、木下是雄、徳島和男、植田佳徳、南泰彦、尾上昇、大倉昌身。六千五百円―廣瀬一隆。五千円―能勢建夫、三好まき子、久保孝一郎、渡辺その子。

十二月四日現在累計三二一名、累計金額三、二一〇、五〇〇円



この電話でもお知らせしています

●図書委員会の催し

(1) 第十九回山岳史懇談会
題目 法政大学山岳部「山想」をめぐる人々

講師 いそじまゆう子 五十島一晃氏

期日 二月十五日(金)六時三十分より

場所 山岳会ルーム

(2) 第二十二回山岳図書を語るタベ

テーマ 山の画文集について

講師 山里寿男氏

日時 三月十五日(金)六時三十分より

場所 山岳会ルーム

(3) 第二十九回この一本展

テーマ 山の画文集

日時 三月十五日(金)六時より

場所 山岳会図書室

(予告)

●山岳地域に於ける環境保全

シンポジウム

―し尿・雑排水処理問題―

日時 平成三年四月六日(土)午後一時から五時まで

場所 青山学院

(詳細は次号に掲載します)

科学研究・自然保護委員会共催

●平成2年度山スキー講習会

左記の日程で山スキー講習会を行います。詳細な計画と、申込書は別途個人別に送付いたしますので、ハガキにご希望の講習会のナンバーを記入の上、ルーム(指導委員会)あてにご連絡をして下さい。

記

1 至仏山(尾瀬)三月十五〜十七日
テント泊、自炊。人数は制限させて
いただきます。

2 雪倉岳(白馬)四月五〜七日

主任講師降旗義道氏、蓮華温泉泊

3 八甲田山(青森)四月十九日〜二十一

日

城ヶ倉温泉ホテル泊、飛行機利用。

婦人懇談会との共催

訂正 十月号(五四五号)の一頁
と三頁の写真撮影者が市川義輝氏
とあるのは田中茂夫氏の誤りにつ
き訂正致します。(A・O)

『山岳』八十五年 三十四頁四
行目 Godfrey A. solly → Godfrey
I と訂正します。(T・M)

謹賀新年 本年もよろしく

会報編集委員会

平成三年一月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五一四

サンビュウハイツ四番町

発行所 社団法人 日本山岳会

発行者 山田二郎
編集代表 小倉厚

電話東京(326) 四四三三

振替口座 東京三一四八二九番

東京都港区赤坂一―三一六

赤坂グレースビル

印刷所 株式会社 技報堂